

化粧品一筋に生きた「坂東武者」

「実家に帰ってくると、家で叔父を相手によく将棋を指していました。格闘技が好きな人で、特に相撲は大好きでした。キックボクシングも好きでしたね」

日本を代表する化粧品メーカー「コーセー」の創業者、小林孝三郎(1897-1995)の人となりについて、親類の坂東市岩井、有限会社釜屋商店の小林章代表取締役(70)はこう語る。

釜屋商店は現当主の曾祖父、小林伊三郎が開いた。伊三郎には五男二女の子があった。男は長男章治、次男庸三、三男孝三郎、四男卓、五男聰三である。

孝三郎は、腕に自信ありの偉丈夫と映る。まるで関東の大地で育った「坂東武者」を彷彿とさせる。その偉丈夫が生涯をかけて取り組んだ仕事は何と「美の追及」だった。

小林孝三郎は、明治30年(1897)6月、父伊三郎の三男として猿島郡岩井町(現 坂東市岩井)に生まれた。小学校が終わると姉の嫁ぎ先だった千葉県我孫子町(現 我孫子

市)へ移った。

そこから、当時、できたばかりの高等科(2年)があった千葉県我孫子町の尋常高等小学校へ通った。級長になった。半面、いじめてきた上級生を喧嘩でやり返した武勇伝も伝わっている。

尋常高等小学校を卒業すると、進学を断念して働くことを決めた。その勤め先が化粧品製造会社、高橋東洋堂だった。明治45年(1912)、16歳の時である。

この年、時代は明治から大正に変わった。孝三郎も化粧品一筋の道を歩み始めたのである。爾来、終戦翌年の昭和21年(1946)までの35年間、化粧品の製造、販売、経営の各分野に携わった。

戦争が終わって時代が変わった。この時、孝三郎が動いた。高橋東洋堂で培った人脈や経験、取得した知識を新時代にどう生かすか。その答えが「独立」だった。孝三郎「50歳」にしての決断である。

小林孝三郎

Kobayashi Kozaburo

この時の思いを孝三郎は後年、「『人を相手にせず、天を相手にせよ』という大西郷の教訓が血肉となったからだ」と述べている。経営理念の「誠実」の原点もこのあたりにあるのかもしれない。

孝三郎は昭和21年3月、化粧品や歯磨剤等の製造・販売を掲げて「小林合名会社」を設立した。以後の会社名(商号)は成長とともに変わった。昭和63年(1988)、株式会社コーセーに商号変更。

コーセーは、資生堂やカネボウ等とともに知らない人がいないほど有名な化粧品メーカーとなった。今や中国、インド、アメリカ等世界各国に進出している。

孝三郎は、昭和63年9月、郷里の旧岩井市に一億円を寄贈した。同市はこれを基金に奨学金制度をつくった。平成17年(2005)、猿島町と合併して坂東市となった現在も「坂東市小林孝三郎奨学金等基金」として引き継がれている。

坂東市によると、平成元年度(1989)から平成29年度(2017)までに孝三郎基金から

奨学金を支給された学生(高校、高等専門学校、短大、大学生)は73人に上っている。(文中一部敬称略)

※主な参考文献
「化粧品ひとすじー小林孝三郎伝」(藤崎武男著、小林禮次郎、小林コーセー創立三十周年記念行事実行委員会発行)、「現代茨城の百人<上>」(鶴岡正夫編集、育英出版社発行)



現在も残る孝三郎の生家=坂東市岩井(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「追求」のヒント